

## 【ふれあい発見推進事業をとおして】

小学部教諭

## 1 ふれあい発見推進事業とは

この事業は、特別支援学校における「キャリア教育推進事業」として、小学部6年生を対象に行われています。主な目的は二つあり、一つ目は「職場で働く人の見学を通して、身の回りの仕事に興味をもつこと」、二つ目は「マナーを守り公共交通機関を利用すること」です。

今年度は小学部6年生の3名を対象に、「おむすびの十楽」に行きました。「おむすびの十楽」は、就労継続支援 A 型と B 型の福祉施設なので、中には知的障がいや聴覚障がいのある方も働いています。

## 2 見学を通じて

まずお店の朝礼を見学しました。職場での朝礼は学校でいうと朝の会のようなもので、始めの挨拶をしたり、仕事の連絡をしたりします。ここでは、朝礼の雰囲気を知ることができました。朝礼の最後に店長が「今日も一日頑張りましょう。」と言



うと、一人の児童が「はい!」と素晴らしい返事をしました。すると店長から「あ

の子のように従業員もいい挨拶を心がけましょう。」と話し、挨拶の大事さを確認することができました。日頃から挨拶を意識して生活していたので、自然と良い挨拶が出来たと思います。学校生活で頑張っていることは社会に出ても活きるのですね。



次に、調理場の様子や使う道具などを見学しました。調理場に入る前には、必ず手をしっかり洗います。お客様に提供する料理を作るので、清潔は重要です。

また、お店ではおにぎりをたくさん作るので、写真のような大きな鍋を使って、米を炊いていきます。「この鍋は一回で十合炊

けるんだ」、「学校で使った炊飯器より大きい」などといった学びがありました。最後に、好きなおにぎりを1個買って食べました。初めて券売機を使います。お金を入れるのも楽しいです。店員からおにぎりを受け取ると、子どもたちに笑顔があふれました。



### 3 公共交通機関を利用して

今回のふれあい発見推進事業では、バスに乗って移動しました。どの児童も乗り物に興味をもっているのが、普段から図鑑やタブレットで見たり調べたりしています。そのため、「バスに乗ることが一番楽しみ」と言っている児童もいました。

二つ目の目的として、マナーを守って乗ることがありました(もちろん、楽しく乗ることは大事ですが)。乗車中は他のお客さんの迷惑にならないように、歩き回ったり、大声で話したりしないなどといったことは、さすが6年生の皆さん、既に当たり前のように知っていましたね。ですので、他の車や外の景色が

気になりつつも、マナーを守りながら楽しんでいました。そして、乗るときにはきっぷを取る、降りるときには降車ボタンを押すなどの基本的なことから、降車するときは、運賃をすぐに払えるようにお金をあらかじめ準備して、ポケットに入れておくなどといった、上手に乗るためのコツも学びました。また、行きのバスでは優先席を譲ってもらい、「ありがとうございます!」としっかりとお礼を言えました。帰りのバスでは、高齢の方が乗車してくると「どうぞお座りください!」と自分の席を譲ることもできました。マナーを守ることはもちろん、お互いに相手を思いやる経験をすることで、地域の方々との温かいコミュニケーションができましたね。



#### 4 さいごに

今回のふれあい発見推進事業では、仕事を見て学ぶということが中心でした。6年生の皆さんはもうすぐ中学部になります。そして高等部を卒業して働くことを考えると、あと6年後にはもう社会に出て働いている人がいるかもしれません。小学部の入学から卒業までの6年間があっという間のよう、これからの6年はもっと早く過ぎていくように感じると思います。私自身、6年前はまだ高校3年生でした。受験勉強している自分が「6年後、教員として卒業生を担当しているよ」と聞いても、まったくイメージができなかったと思います。ですが、私が岡崎盲学校の先生になれたように、みなさんもなりたい自分になれるはずです。小学部卒業は“終わり”ではなく新しいステージでの“始まり”です。そのためには、なりたい自分になれるようにこれからも頑張っていきましょう!



# 【進路講演会 実施報告】

高等部普通科教諭

10月3日(木)5・6限に進路講演会が行われました。講師として昨年度まで理療科教員としてお勤めいただいた長崎龍樹先生をお招きして、「理療科教員になるために」を演題として、高等部普通科生徒を対象に、将来を見据えた進路を考えることについて講演していただきました。長崎先生が話された内容を掲載します。

## 1 幼少期の生き立ちや家庭環境の変化

私は視覚障がい家系(母方祖父母・父母・妹(長女)・自分は視覚障がい、父方祖父母・弟・妹(次女)は晴眼者)に生まれ、地域の幼稚園に通ったのち、名古屋盲学校小学部に入学しました。視覚障がいの妹(長女)も私と同じように名古屋盲学校小学部へ入学し、弟と妹(次女)は地域の小学校へ通いました。しかし小学部時代、妹(長女)が買い物へ出かけた帰りに交通事故で亡くなってしまいました。そこから父母の関係が悪化し、意見の食い違いから小4のときに親が離婚。母方の祖父母と一緒に生活していました。祖父母は治療院を経営しており、1日50人施術するほど患者がいました。昔は病院よりも治療院に行って治す人が多かったことが影響していたかもしれません。この経験から理療師が身近なものに感じ、兄としてしっかりしないといけないという気持ちが芽生えました。

## 2 私が夢を抱いた頃

当時のテレビドラマである「3年B組金八先生」を見て、生徒に寄り添い引き付ける姿を見て影響を受けました。教員は感動を与えるものでエンターテイナー的な感じに捉えていました。しかし当時の学力は良くなく、小学部から理系が苦手でした。周りは理解していても自分は理解できないことが多かったです。ただ暗記することは得意だったため、意味は分からないままでもひたすら暗記することに専念していました。教員になりたいと家族へ伝えると、祖父から「教員

になりたいなら塾に行って勉強しなさい」と言われました。弟の友達の父が塾講師をしていて、祖父が塾へ通えないかお願いして通うことになりました。授業の予習と復習を繰り返したことで成績がぐんぐん上がりました。また当時は先生になりたいことや塾に通っていることを周りに自慢げに話していました。授業中に塾でやったノートを見せて注意されたことは何回かありました。自分のことを客観的に見れなかったのが、今思うと原因ではなかったのかと感じています。中学部に上がり塾は継続していましたが、祖父が倒れ1年寝たきりとなり介護をしていました。その当時介護保険はなく、収入源がなくなって生活が心配になりました。1年後(中2)に祖父がなくなり、3か月後に祖母も他界してしまいました。その後、理療の資格をもっていた母が治療院を引き継ぎ、子供3人を育てていました。祖父の時より患者は減りましたが、母は一生懸命働いていました。しかし母は仕事で忙しく、外食も多かったため貧乏生活となってしまいました。理療業は患者の数に収入が左右されてしまうことを知り、このことがきっかけで治療院を継ぐよりも教員として安定した収入を得ることが大切だと考えました。理療科教員という仕事があることを知っており、母の知り合いにも理療科教員の人がいたため、よく話を聞いて勧められていました。実家の治療院で施術をしている場面を見ていたため、モデルはあったからイメージは付きやすかったものの、当時は人に触られるのが嫌いで、マッサージやはりに良い印象をもっていませんでした。そのため、理療科教員になるイメージがなく、自分にはできないと思っていました。しかし、当時は教員になったら借りた奨学金を返さなくてよいという制度があり、奨学金を借りて教員になれば授業料が実質タダになると思い、とりあえず理療科教員を目指すことにしました。



当時の先生方が実力を身に付けるために褒めて育ててくれたおかげで模試でA判定を取ることができました。また、学校の先生や理療科の先輩に理療科

教員になるためにどうしたらいいか聞くと、「現状、名古屋盲学校しか知らないから東京にある筑波大学附属視覚特別支援学校へ行った方がいいよ」とアドバイスをいただき、お金が無いながらも母が家庭教師を雇って入試に向けて勉強していました。家庭教師には勉強以外にも恋愛や人生相談にのってもらいました。その先生とは今でも年賀状のやり取りをされていて、教員になれたのも家庭教師の先生のおかげだと思います。勉強の末、筑波大学附属視覚特別支援学校専攻科に合格しました。

そして入学と同時に寄宿舍での生活が始まりました。当時20名ほど舎生がおり、8帖の部屋に3人、光が入らずカビ臭いような部屋で生活していました。専攻科の同級生はみんな賢い子ばかりで、中には全盲の友達で授業が終わると学習塾に行って数学を勉強している人もいました。専攻科でも語呂合わせなどでひたすら暗記に勤しんだものの、成績は良くも悪くもない感じでした。母からの仕送りに合わせて奨学金も借りながら生活していました。当時は国家試験がなく、2年生であん摩マッサージ指圧師の免許を取って、3年生は下田の温泉地でアルバイトをしていました。アルバイトの際はどのくらいの時間施術したらどのくらいのお金がもらえるかなど、お金の勘定について考えることが多かったのですが、あるとき施術していたおじさんに「それでも理療士か!」と怒鳴られた経験がありました。その時に、ちゃんとやらないといけないという気持ちが芽生えました。筑波大学理療科教員養成施設には、校内の成績優秀者1人のみ推薦がありました。推薦はもらえなかったため、一般入試を受験しました。寄宿舍に鬼の先輩がおり、その先輩が施術の練習台や小論文の練習を行ってくれました。その時は先輩が来ると苦痛で面倒くさいと感じていましたが、運も味方につけて筑波大学理療科教員養成施設に合格することができました。後に先生から合格したのがギリギリだったと教えてもらいました。

理療科教員養成施設はさらにエリートばかりで、半分以上が大卒や社会人から入学した人でした。盲学校から来た人と社会から来た人との対応が違いましたが、理療の勉強以外にも一般教養、心理学などたくさん学ぶことができました。自分の力だけでなく、周りの人の力で教員になることができたと思っています。

### 3 私が教師になって分かったこと

初任校は岡崎盲学校でしたが、3年目から名古屋盲学校へ転勤しました。学生時代に本質を理解せずに暗記に頼ったことがあだとなり、生徒から深い質問があっても対応できず質問されるのが嫌でした。当時は、理療の資料があまりなく、インターネットもなかったので質問された内容について調べられず頼りない感じでした。また、施術の練習台になると力が入ってしまい、生徒から力を抜いてほしいと指摘を受けることがありました。施術に慣れるため、ツボに自分ではりを打ち、顔、腰、背中、手など練習していたら慣れて施術してもらうことに抵抗がなくなりました。そして教員になってから改めて理療について勉強しました。さらに日本福祉大学通信教育学部に通い、福祉について学びました。その後、日本福祉大学大学院（通信）でも勉強し、中途失明に関する研究を行いました。様々な職種の人とゼミで話をし、晴眼の人たちに盲学校について伝えることができました。

理療科教員をしていく中で、視覚障がい者の理解は盲学校だけでは限界があり、社会の人にも理解してもらう必要があると感じました。特に視覚障がいは軽視されていることが多いです。そのため教員になり



たい人ほど特別支援について学ぶ必要があるため、現在は日本福祉大学で非常勤として視覚障がいについて教えています。学生のレポートから視覚障がいについて気付かされることがたくさんあることを知り、大学の非常勤講師を行っている意味があったと実感しています。

### 4 みなさんに伝えたいこと

1つ目は、「自分の好きなことが何かを自分に問う」です。実際に教員をやっていると生徒に教えるだけでなく、生徒から学ぶこともあり、とても良い経験ができました。自分の好きなことを見つけて、それを続けていくことが大事だと思います。



います。まずは自分と向き合ってみましょう。

2つ目は、「一生を左右する感動があるか」です。私は、ドラマの金八先生に影響を受けました。感動したことから自分の好きなことへ結び付けて夢をもつことをお勧めします。まずは、自分の好きなことは何か、から考えるとよいです。そのために情報を集めてから考えることが大切ですが、たくさんの情報よりもいくつか絞った情報を参考にした方が良い方向へ向かう場合があります(ジャムの法則)。学力の良くない生徒が慶應義塾大学へ合格するという小説「ビリギャル」の話で、合格するためにひたすら試験に出る問題を中心に勉強したと聞きます。ぜひ「ビリギャル」も参考にして今後の夢について考えてもらえるとよいと思います。

3つ目は「自分の強みを生かす」です。弱みよりも強みとして最大限生かし、周りのサポートをもらいながら活動に取り組むことも必要です。

4つ目は、「失敗を恐れない」です。夢が決まったら考えるよりも行動した方がよく、何度でも挑戦すれば成功することがあるため行動に移すことが大事です。大学に行ってみる、過去問を解いてみる、学生にインタビューするなど自分を大切に行動して夢をかなえてほしいです。

## 5 進路講演会に参加した執筆者からの感想

講演の質疑応答で、生徒から「つらいときはどのように乗り越えてきたのか。乗り切るアイデアがあれば教えてほしい」とありました。人に相談にのってもらうことや本を読むと悩みが解消されることがあったとおっしゃっていました。今回の講演で長崎先生が教員になった経緯や経験を聞くことができ、とても学ぶことが多かったです。何事も「行動に移す」と分からなかったことが切り開かれたり、新たな気付きを見つけたりすることができるかもしれません。理療科教員の採用も今となっては少なくなっているため厳しい状況ではあります。それでも頑張るか、またはあん摩マッサージ指圧師・はり師・きゅう師の資格を取って理療業を行うのでもよいかもしれません。理療について気になることがあれば理療科の先生に聞いてみると教えてくれます。場合によっては授業を見学することもできるかも……。



## 【宝島】

高等部理療科教諭

皆さんこんにちは。前回の DREAM が発行されたばかりですが、引き続いて私の進路選択にまつわるエピソードを書いてみました。楽しんで読んでいただいている方もおられるようで、「次はどうなるんですか？」と声をかけてくださる方もいます。そういった方たちの応援を力に変えて、この先の状況も記していきたいです。しかしながら私の考えすぎかもしれませんが、「そろそろ完結してほしい」や「長すぎ!」といった感想をおもちの方もいることでしょう。

というわけで進路選択とは直接関係ないかもしれませんが、少し視点を変えた内容を今回はまとめてみたいと思います。

### 15 「拝啓、17歳の君へ」 その①

私が17歳の頃、何に悩み、何に夢中になり、何にこだわっていたのかを思い出してみたいと思います。読者の中には、17歳をすでに迎えた方、まだ17歳に達していない方、そして今まさに17歳の方など、様々な年齢の方がいらっしゃると思いますので、それぞれの立場で私の文章を楽しんでいただければと思います。

私が17歳の頃に悩んでいたのは、「自分の見た目」でした。現在では何気ない一言も私たちの病気のことを知らないために発せられた言葉だと理解できるのですが、かけられる言動に、当時も含めてその後しばらくは傷ついたり、落ち込んだりしました。「変な顔」、「変な目」、「どうして顔の真ん中に目と鼻が集まっているの?」、「写真を撮ると目の部分に影ができるよね」など、きりがなくらいの言葉が思い出されます。おそらく、視覚障がい者の多くが一度は浴びせられたことがあると思います。これに対して、色の濃いサングラスをしたりして、見た目があまり目立たないようにする方もいます。では私はといえば、母親も心無い一言に傷ついたことがあると聞いていたので、これらの言動で自分が傷ついたことがあるとは両親の前で打ち明けたことはありませんでした。親からも

「外出するときはサングラスをするように」と促された時も、「そのほうがカッコいいから？」などと、おどけて見せました。今では紫外線の影響で子供から高齢者までサングラスをかけていても違和感はそれほどありませんが、当時は目



立っていました。また私は小説やアニメで聞くことがあった「目を見れば分かる」とか、「目つきが変わった」などの表現にも強い興味がありました。自分の眼の見え方も含めて、「笑って!」と言われたときにどこに力を入れれば笑っているように見えるのか、自然な表情に見えるのかということも悩みました。「笑ってみて」と言われてその表情をしたつもりでしたが、「なに、にやついているんだ」と一喝されたこともあります。17歳の頃は自分が中心だ

だったので、自分が傷ついたことや悩んでいることが大部分を占めていました。しかしその一方で、自分も同じようなことを他の人にしていたことにも少しだけ気付いていました。

私の同級生には、足の不自由な子がいました。そして寄宿舎の同室者にも、知的障がいの子がいました。特に寄宿舎では生活を共に送っていることから、「不思議」と感じてしまう行動が目につき、いじめているつもりはなかったのですがいろいろな“ちょっかい”を出していました。その時の反応が私たちとは違ったものだったり、想像しえないものだったりしたことが、だんだんと「こんなことをするとどうなるんだろう」、「この行動を中断させると怒りだすんだな」といった興味や理解に繋がっていきました。つまり、知らないからこそ傷つけてしまっていたのです。そっくり自分の立場が変われば、私も他の人には同じようなことをしていたのです。

では話を元に戻して、私が自分の見た目をどう受け止めていったかといえば、性格やファッションで第一印象にインパクトを与えることができれば、顔の見た目はあまり注目されないのかも考えるようにしました。とはいえ、清潔感をもたれるためにはボディーシャンプーなどへのこだわりをもったり、良い香りがするような香水（当時はコロロン）を使ってみたりするようになりました。また、「目は口ほどにものを言う」ということわざがありますが、私たちは声色や話し方、その人の香りや足音など、実は目以外で捉えている情報がたくさんあります。「この人の声が好き」、「この人の話し方が好き」、「この人の性格が好き」などと考える人もいることでしょう。そして、こういった同じような価値観をもった人も世の中にはたくさんいます。



※ 実際の私服です。  
マチコミメールで配信した DREAM  
で、ぜひカラー写真をご覧ください。

自分がコンプレックスに感じていることを克服するのは本当に難しいことですが、視点を変えてみると何か対応策が見つかるものです。その策に気付くには、本を読んだり多くの人とのかかわりをもったりするなど、自分にはない発想や情報を得ることが大切だと思います。悩んだら引きこもらず、逆に外に向かって「こんなこと言われちゃったんだよね」とか、「変だっていうならどうすれば変じゃないの？」なんて、もう一つ先に行く行動をとればいいんじゃないかと思います。



## 【点字から考えるバリアフリー】

進路指導主事

今年度、中学一年を終える反抗期真っ只中の我が家の次女が、学校の授業で書いた人権作文を家に持ち帰り、無愛想に手渡してきました。ただ、その文面からは親の前であまり見せなくなった情のある考え方や想いを垣間見ることができ、親として少し安心したのと同時に、特別支援教育に携わる人間として嬉しく感じました。思い付くまま筆を走らせたような拙い文章ですが、多様性を重んじるZ世代が点字について考えたひとつの取組として、こちらで紹介させていただければと思います。

---

私の父は盲学校の教員をしています。そして時々、目が見えない人の仕事や生活の大変さを聞くことがあります。私は小学生の時、エレベーターのボタンに付けられたブツブツした点の集まりのことを父に聞き、それが点字だという事を初めて知りました。それまで学校で教えてもらうこともありませんでしたが、それから何となく点字に興味をもち、父に解説本を借りて調べ始めました。点字は目が見えない人のためにつくられた文字で、六つの小さな点を組み合わせ、かな文字の五十音をすべて表すことができます。また複数のマスを使うことで、アルファベットや漢字や音符まで表せることも知りました。点字は駅の券売機や掲示板、市役所やショッピングモールのトイレ等に付けられ、目が見えない人の生活にとって欠かすことができない大切な文字になっています。

しかし、私はこの点字の扱われ方について気になることがあります。それは公共の場所に貼られている点字のシールがはがされていたり、図書館にある点字本の文字が潰されていたりすることを時々見るからです。それらは悪意の行為というより、点字をよく知らな



い人たちが軽いイタズラのつもりで行った事のようにも思えます。しかし目が見えない利用者は、困ったり悲しい思いをしたりしているに違いありません。そういった点字の扱いを目にすると、とても残念で寂しい気持ちになります。この出来事は、点字はただ付ければよいというだけでなく、目が見える人たちにその大切さを知ってもらうことが必要だと感じるきっかけになりました。

また、点字は家電製品や食品などの商品に付けられることもあります。しかし身の周りにある物を探しても見つけれられることの方が難しく、まだまだ多くの物に点字は付けられていません。商品に点字を付けるメーカーは、人に優しく信頼できる会社だと思います。しかし、点字探しをしているなかで、その付け方にも気になることが出てきました。例えばビールやワインや日本酒など、アルコール飲料のカンやビンには、ほとんどすべて「 $\cdot\cdot\cdot\cdot$  (おさけ)」という3文字の点字しか付けられていません。点字が無いより付いている方が良いと思いますが、お酒の種類が区別できた方がもっと良いはずです。また、パンに塗るジャムも同じように、ほとんどのビンに「 $\cdot\cdot\cdot\cdot$  (じゃむ)」という点字が付けられているだけで、何の味かは伝えていません。イチゴ味やリンゴ味など、私たちが当たり前に選択できることができないのです。他にも調味料やふりかけなど、同じメーカーでもサイズの大きな物には点字が付き、小さな物には点字が付かない商品もありました。これでは異なる

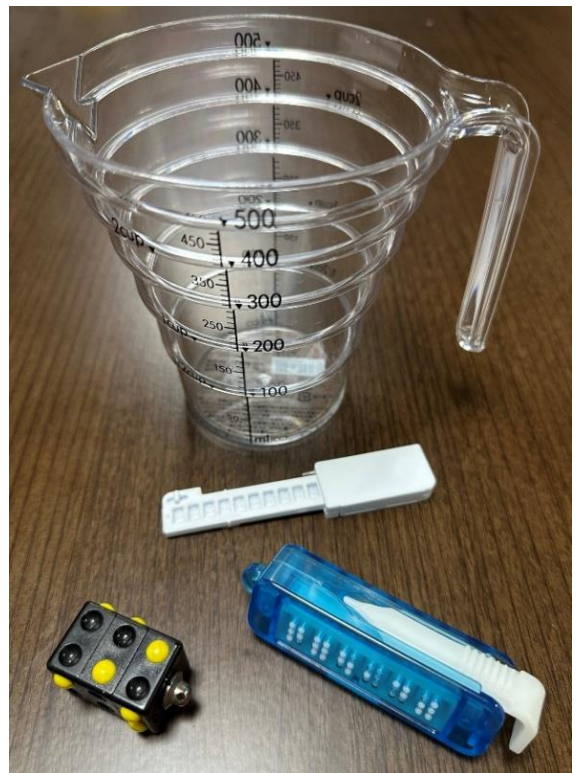


るサイズがあることに気付くこともできません。目が見えない人も私たちと同じように、自由に好きな味や食べたい物を、必要な量を考えながら選んで買い物をしたいはずなのに。

点字のことをいろいろ調べていくうちに、英語以外の点字はほとんど読めるようになりました。また、半年ぐらい点字文のルールを勉強し、自分の点字板を買ってもらって文章を打つこともできるようになりました。そして、街中の点字掲示板などに書かれている内容を読むことで、新たに気付くことや疑問に思う事も増えていきました。

時々、目が見えない人の生活を想像して、もっと点字を使いやすくする方法はないかと考えることがあります。私はまだ目が見えない人のように指先だけで点字を読むことはできません。でも、もし目を閉じていても点字が読めるようになったら、ほんの少しでも目が見えない人の気持ちが分かるようになるのかなと思います。今は、指先だけを使って点字を読む練習をしています。

私自身も歳をとったり、もしかしたら病気になったりして、これから目が見えにくくなるかもしれません。誰でも可能性のあることですが、そうなった時のことを想像すると、今のままの社会で生活することは少し怖いのです。しかし点字の大切さを知ってくれる人が増え、また目が見えない人のことを考える機会やイベントなどが増えれば、点字の付いた商品や目を補助するためのアイテムもきっと増え、今より過ごしやすい生活に変わっていくと思います。そ



して、もしかしたら何かをきっかけに、誰でも点字を読んだり勉強したりすることが特別ではない世の中になるかもしれません。それは目が見えない人だけではなく、将来の私たち誰にとっても安心して暮らせる優しい社会に近づいていくことだと思います。そのためにも私は、まずは点字からバリアフリーについての知識を広げ、自分にできる発信もしながら、今より素敵な社会になることを考えていきたいです。